さしかけだより

62年 4月 1日
第 5 号
鳥 取 県
栽培漁業協会

養殖ワカメの収穫を終えて・・・・・

３月１０日，栽培漁業センターに於てワカメ増・養殖検討協議会が開催されました。

この会議はワカメ増・養殖に取り組んでいる賀露，浜村，夏泊，青谷，泊，中部，赤碕（養殖）中山，淀江（増殖）の組合，グループが，61年度の経過の中間報告を行い，幾つかの問題点について協議，そして今後の方針を検討したものです。

下の表は，施設の破損等のなかった５組合の３月１０日現在の結果です。

収穫状況については，組合によって収穫時期，収穫量に大きな差があるようですが，その要因の１つに施設の設置条件によるものが考えられます。浜村，泊のように船の操業区域内で行う場合，船の航行に支障の無いと思われる水深３ｍ位に施設を設置する為日射量の不足で生長が悪く，ついては収穫時期の遅れ，低い収穫量という結果を招いたようです。一方赤碕，青谷のように港を利用した場合，波浪の影響が少ないこと，栄養塩が多いと思われること，設置水深が浅い為に充分な日射量が得られたこと等が好結果へとつながったようです。特に赤碕が収穫時期，収穫量共に良い成績となっているのは，センターの指導通り，種糸の一定期間の沖出しを行ったことや，間引きを行う等細めな管理をしてきたことがさらに好影響を与えたと考えられます。

販売方法等については，殆どの組合が生出荷している為，金額が低く生産収入も良くないようです。今年から夏泊のグループが乾燥器を購入し，加工して販売を行っているようですが，以前から中山，淀江地区では天然ワカメを加工して販売し，高い収入を得ている為，各漁協共有利な販売方法を積極的に考えていく必要があると思います。

収穫・販売状況

	賀露	浜村	夏泊	青谷	赤碕
購入糸の量（m）	1000	2000	3000	1400	1000
収穫開始時期	1月28日	2月15日	2月 6日	1月16日	1月12日
収穫回数	3	4	7	4	4
収穫量（Kg）	340	300	1122	882	1512
販売金額（円）	71400	55800			362880
単価（円／Kg） 生	210	186			240
単価（円／Kg） 加工			11000-13000		
販売方法	漁協	漁協	漁連，個人		漁協

ウニの移殖を訪ねて

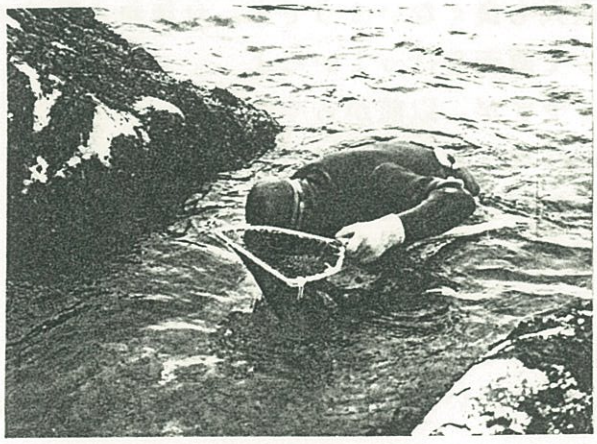
今回はウニの移殖放流をやっている酒津の樽谷捷二さんを取材しました。

このウニの移殖放流は，お父さんの代からやっていて，30年位たつそうです。移殖放流用のウニは，兵庫県の諸寄の潜りの人に頼んで採集してもらい，約１時間かけて車で運搬して来るとのことでした。１回の移殖は５ｃｍ径のものを30-35.0ｋｇ位づつやり，それを４月から６月の間に30回程繰り返すので，１年間の移殖量は1,000ｋｇ程度，金額にして150万から200万円になるそうです。移殖場所は海草の多い所，冬に砂のつかない所，潮の流れが入りこまない所など，今までの経験で，ウニの身入りの良かった場所に放流しているそうです。害敵（ヒトデ）の駆除は頻繁にやっているとのことですが，放流時期には特に念入りにし，漁場管理には気をつかっている様子でした。最近は，沖堤ができた為に磯場に砂がつき，ウニの生き残りが少なくなって，稚ウニの移殖代も大変になってきたとおっしゃってました。今後センターで安い稚ウニができて，その稚ウニを放流できたらと思ったりして，ウニの種苗生産に期待しているとのお話でした。

今回の取材で，30年も前からつくる漁業をやってきた樽谷さんに，我々も学ぶことが多々あることを感じ，大先輩としての力強さをみたような気がしました。

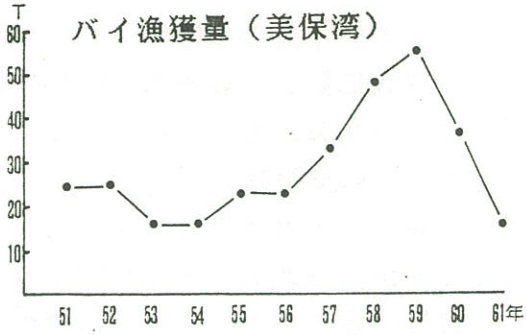
アワビ種苗放流を終えて

3月30日中部漁協（宇野地先）がアワビ稚貝の放流を行ないました。漁業者はウエットスーツに身を包み，アワビ稚貝の好適放流場所といわれる0.5～1mの磯場に稚貝を付着させながら，食害の原因であるヒトデの駆除も行いました。宇野地先は管理が良く行き届いており，以前放流したアワビ稚貝も成長している姿が見られましたが，有利な販売を行う為，漁獲サイズを設定して，放流貝の本格的な漁獲はまだしていないようです。放流から漁獲までを計画的に進めている処は県内ではまだ少なく，アワビ栽培漁業の見本となってくれることでしょう。

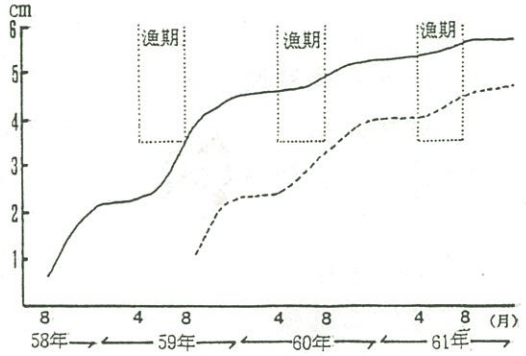


バイ資源管理型漁業に向けて

一般にある魚種の漁業を盛んにする為には，資源を増大させる積極的努力（種苗放流等）を進めると共に，資源を適正に管理しながら最大限の漁獲を維持する（管理型漁業）必要があります。



鳥取県では，昭和56年より美保湾を中心とした漁協がバイの種苗の放流を行っています。その後58,59年と漁獲量の増大をみましたが，60,61年では減少傾向にあることが伺えます。この原因の一つとして58,59年の漁獲強度の増大，つまり58年の小型貝，また産卵親貝の獲りすぎが考えられます。更に他の原因としては食害種ヒトデの駆除が徹底されていないことが考えられます。昨年度のセンターの調査で，操業海域にはヒトデがかなり高密度に生息している事がわかりました。また，図に示したように，バイは生後２年にならないと漁獲の対象サイズまで成長しないようであり，生まれた年の10-11月頃（放流後2,3ケ月）のサイズ15-16mm位迄は，ヒトデに食害される危険が大きいようです。



成長図（水槽飼育）

これらの対策としては，バイ漁場での操業者（籠，桁曳，刺網）が平素船上に揚ったヒトデを陸上に持ち帰ること。（ヒトデは引き裂いて海に捨ててもまた再生してしまいます。）産卵親貝の保護対策として，毎年一定区域を決めて産卵期の禁漁を行うこと。あるいは淀江漁協がマダコに対して行っているような産卵基物の投入等，天然での再生産を促すこと等が必要です。

バイに限らず，今後安定的に資源を漁獲していく為には，上記のようなことに漁業者が積極的に取り組むことと，栽培漁業推進の体制が漁協あるいは同業者間で組織化される必要があると思います。

さかなのおはなし

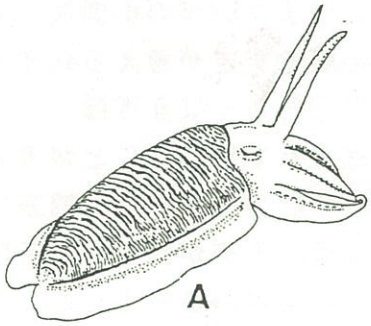
今年も甲イカの産卵期が近づき，甲イカ籠漬漁が始ろうとしています。甲イカは分類上からみると軟体動物で，十腕類に属しています。また，甲イカの名のとおり，体内の背中の部分に舟型の貝殻を持っていることは皆さんも御存知のことでしょう。

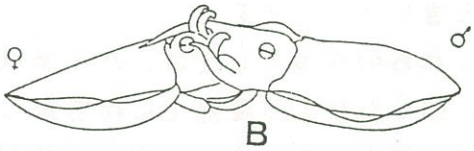
一般に，イカは自分の身を守るために砂に潜ったり，体色を変えたりしますが，一番よく知られているのは墨をはくことです。特に甲イカの墨袋は，他のイカに比べてよく発達していて，船上に上げると次から次へと墨を出して，あたり一面真っ黒になるので，別名スミイカとも呼ばれています。

これから産卵期に入る甲イカは，海の動物のなかでもとりわけ繁殖時のラブシーンが激しいといわれています。

その様子は，オスがまず図上のように背中の縞模様をくっきり浮だたせて，金属光沢に光り輝きながら，他のオスを威嚇してメスに近づいてゆきます。交接は図下のように，オスの10本の足のうち，生殖腕となっている１本の足で，メスの腔内に精子を入れたカプセルを送り込みます。他のイカと違って，甲イカは受精後すぐにメスが産卵するのが特徴です。

甲イカは成長するのも早いのですが，オスもメスもこうした繁殖行動を終えると，大きなものでもわずか１，２年といわれている短い一生に，我が子の姿をみることなく，終止符をうちます。





コウイカ目の性行動

A：コウイカ(♂) のディスプレイ
B：コウイカ類の交接姿勢

センター情報

種苗放流状況

アワビ（配付予定）

配付漁協	個数	配付漁協	個数	配付漁協	個数
浦　富	5000	田　後	5000	網　代	15000
福　部	3000	浜　村	5000	夏　泊	10000
青　谷	10000	泊	20000	中　部	20000
赤　碕	7000	中　山	20000	淀　江	5000

種苗生産状況

（量産魚種）

アワビ：（種苗生産）61年10,11月採苗分3～20mm　約50万個飼育中
（中間育成）平均サイズ22mm　7万個飼育中

ヒラメ：2月10日産卵開始
ふ化仔魚約290万尾収容（4月1日現在）
平均全長約3～4mm飼育継続中

（試験魚種）

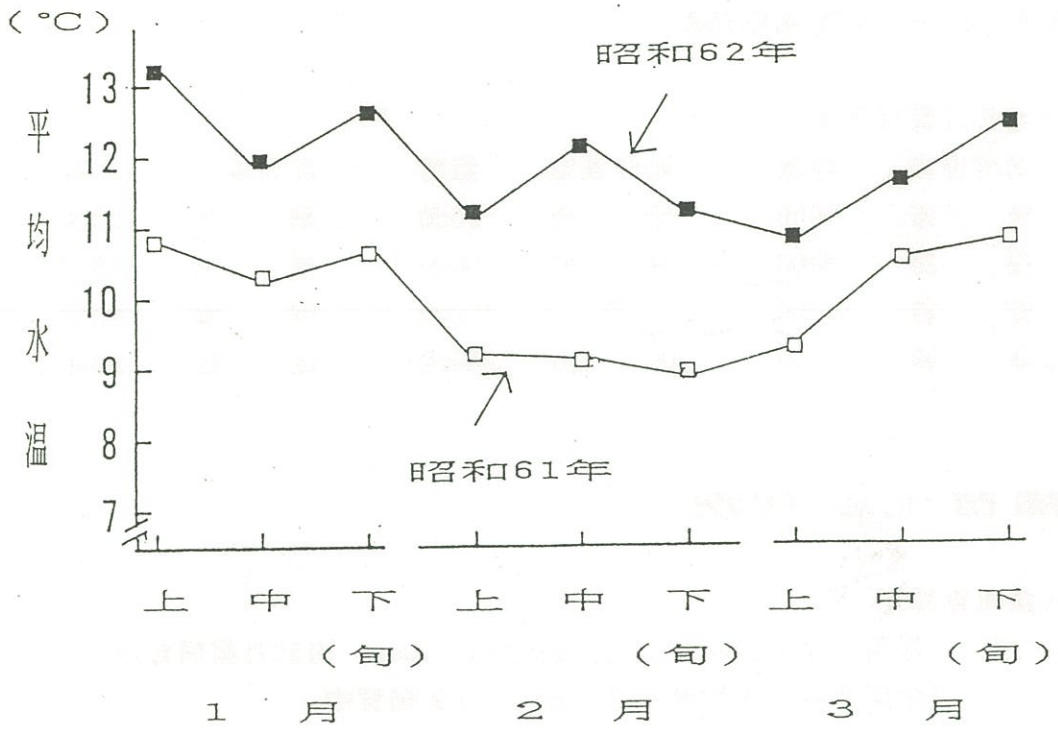
ズワイガニ：1月29日～2月5日ふ出幼生　約39600個体収容
3月13日～3月22日ゾエア2期，メガロパ幼生　2588個体取り上げ飼育中

サザエ：60年10月採苗分　平均殻高17mm　約16000個および61年7月採苗分平均殻高6mm　約50000個飼育中

オニオコゼ：61年7月採卵分　平均全長約5cm　約2900尾飼育中

水温状況

センター注水温



旬別平均水温の推移

上の図からも分かるように本年の水温は昨年より高く，特に1月，2月は2～3度高い傾向で推移しました。

＊編集部からのお知らせ

皆様からの強い要望により，本号よりセンター内の水温データーを載せることになりました。漁業者の方になにかの参考にしていただければ幸いです。

今後も多くの意見，御要望をおまちしています。

鳥取県東伯郡泊村石脇
鳥取県栽培漁業協会内「さいばいだより」編集部
０８５８－３４－３３２１・３３２２